

『敗戦真相記』を読む/敗因-5「科学的遅滞/マネジメント」

企業経営漫談士 岡野実空

我がラスト(50)スパートも、いよいよ残り11回。「軍事学/地政学」シリーズの7回目は、永野護氏が挙げる敗戦の「真因」にあたる「科学的遅滞」の後半。今回は太平洋戦争の敗因すべてに関わり、しかもその中心に位置する「科学的マネジメント」について考えます。

その1:「科学的マネジメント」の欠如

永野氏はレーダーや原爆に続き、土木建築の例をいくつか挙げ、我が国の「科学の後れ」を例証した後、いよいよ問題の核心に踏み込みます。

「ところで、このような科学兵器の差というものは目に見えるから皆納得するが、目に見えないで、もっと戦局に影響したものはマネジメントの差です。残念ながら我が方は、いわゆる科学的マネジメントというものが、ほとんどゼロに等しかった」と語り、鉄の配分や架橋のお粗末な例を挙げて、「これはマネジメントの差で、科学力や生産量の差ではありません」と断定します。

一見業務に勤しんでいるように見えながら、実は非合理的の塊だった当時の(?)官僚や軍人。一方、いかにも遊んでいるように見えながら、実際は効率的に動いている進駐軍。その対比は、「マネジメント」の本質を理解する上で格好のお手本でした。

その2:「科学的マネジメント」の本質

さて氏の講演は、その後「陸海軍」対立の話題に移り、残念ながら肝心の「科学的マネジメント」について掘り下げていません。そのためここでは一旦立ち止まり、その本質を確認することにし

ます。まず「科学的」とは、「物事を実証的・論理的・体系的に考えるさま。また、思考が事実にもとづき、合理的・原理的に体系づけられているさま」(広辞苑)また「マネジメント」とは、「組織の目的を達成するために、あらゆる資源(ヒト、モノ、カネ、情報、時間など)を最も効果的に活かすこと」そしてその目的は、顧客の満足など「外部」への貢献ばかりでなく、「内部」の構成員の働きがいや能力向上を同時に実現し続けることです。

以上から、「科学的マネジメント」の欠如が一連の「敗因」の「真因」であることを確認できますが、その原因のさらなる深掘りは、いまの私たちに通じるさまざまな教訓をもたらしてくれ

☞参照 『三々な経営』

3-4 企業人の「三多」

☞参照 『続・三々な経営』

Z-11 セミナー活用法・その2

Z-22 「三〇」熟語②三自

☞参照 「四字熟語」で考える経営戦略

Y-05 「内部環境」を考える・その2

その3:「科学的マネジメント」の基礎

その中からここでは、「科学」の部分の掘り下げることになります。企業の「マネジメント」においては、その領域を「自然科学」に限定せず、「社会科学」から「人文科学」に広げる必要があるからです。

因みに「社会科学」でいえば、戦争の基盤となる「経済力」を知るため、さまざまなデータの収集、分析が必須ですが、残された日米両国の資料を見る限り、その差は歴然。また「人文科学」においても、学者などを多数動員し、歴史や文学などから我々の思考や行動の「特性」を研究した米国に対し、敵性語として「英語」を禁止した事実を知るだけで、すでに勝負あったと認めざるをえません。

「科学的」な一般教養とは、本質的な「違い」を生み出すための「基礎」。その幅が狭く、しかも浅い人間が考え出す戦略や戦術上の「違い」は、実に「平凡」であるか、あるいはその対極にある「荒唐無稽」なものばかり。実際、「第二」「第三」の敗戦を主導した参謀の多くが、受験校という現代の士官学校から輩(排?)出された人間であったことを認識し、抜本的な対策を打たない限り、その愚行は組織の終末まで繰り返されることであろう。

そんな今、皆さん自身が行う「自衛」策は、上記の実態を「自覚」した人間同士の「自発」的なネットワーク作り。そしてその学習内容には、くれぐれも「軍事学」や「地政学」をお忘れなく!

2022年10月31日 実空